大阪樟蔭女子大学論集第39号（2002）

家庭における女子学生と親との交流に関する調査
－本学学生の場合－

一　棟　宏　子
若　井　希水子

1. はじめに

幼児虐待、いじめを苦にした自殺、引きこもり、家庭内暴力、少女の援助交際、未成年による凶悪犯罪等、このところ子どものさまざまな事件が報道され、家族や家庭生活をめぐる病理的な問題が多発していることがうかがえる。図1は文部省統計数理研究所の「日本人の国民性調査」[1]で「一番大切に思うもの」を自由回答法で質問した結果を示したものである。1973年以降「家族」と答えた比率は増加し続け、1993年では42%を占めて他の回答を大きく上回っている（図1)。「家庭崩壊」といわれる現在の家族の危機的状況が、このように家族の重要性をことさらに意識した結果に表れているとは、いいすぎであろうか。

また、家庭の機能に関して経済企画庁が1994年に実施した「家庭と社会に関する意識と実態調査」[2]によれば、「家庭の役割が低下している面は何もない」という回答はわずか7.8%であり、大多数の人はその役割が低下してきたことを認めている。中でも、「親の世話をするという介護面」や「心の安らぎを得る情緒面」が最も低下したと答えた人はそれぞれ26.5%にのぼっているが、逆に、家庭に対して最も期待する役割として53.2%が「心の安らぎを得る情緒面」をあげている（図2)。総理府「女性の暮らしと仕事に関する世論調査」[3]においても、最も求める家庭の役割に53.6%が「心の安らぎを得るという情緒面」と回答、先述の調査とほぼ同様な結果が報告されている（図3)。

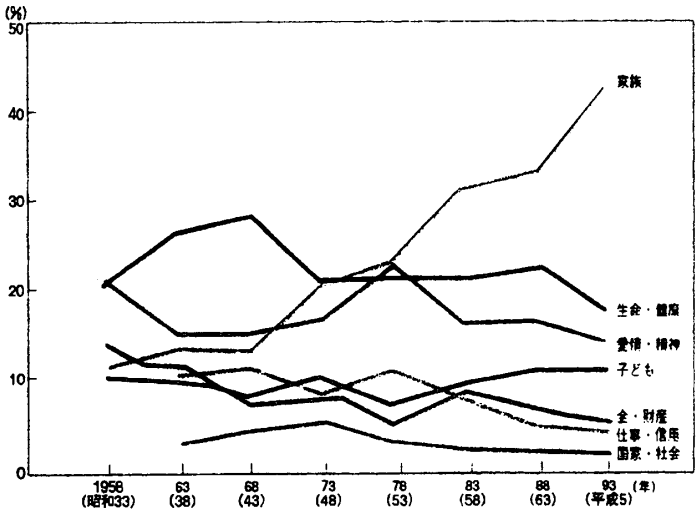

図1　一番大切なものは家族
文部省統計数理研究所「日本人の国民性調査」

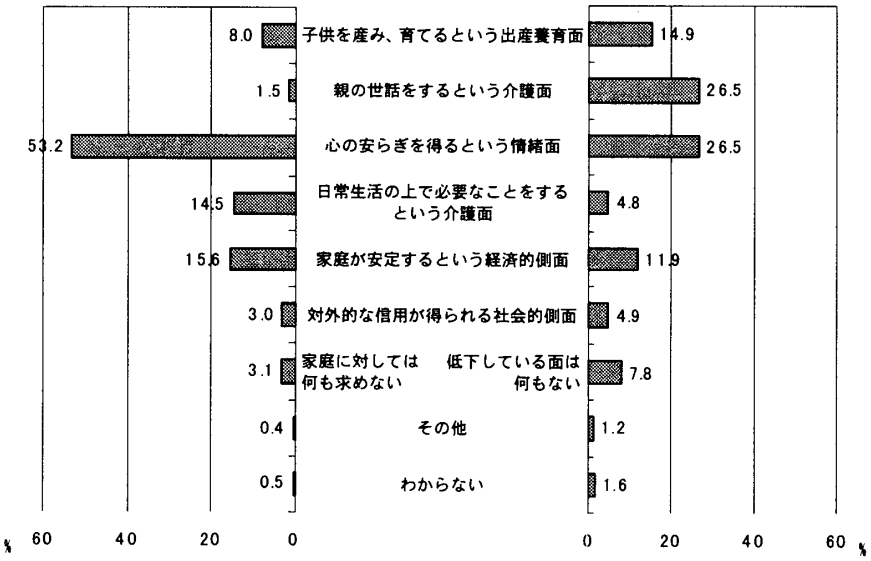

図2　家庭に対して最も求める役割・最も低下している役割
経済企画庁「家庭と社会に関する意識と実態調査（1994年）

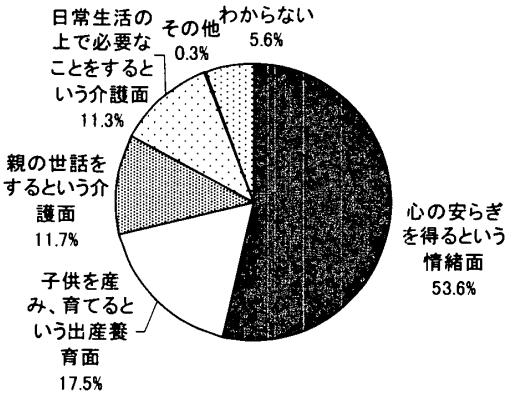

図3　家庭には情緒を求めている
総理府「女性の暮らしと仕事に関する世論調査（平成3年）

このように、家庭における「心の安らぎ」に対する期待は大きいが、それは主として家族のコミュニケーションのありかたに大きく関わっているといえよう。そこで、本報は次世代の家庭を担う女子大学生を対象として、彼等の家庭における家族とのコミュニケーションの実態とその評価を求め、家庭像についてどのようなイメージを描いているかその意識を調べた調査結果について報告する。

2. 調査方法

2000年7月、本学における「生活科学」受講生を対象にアンケート調査を実施した。授業後に調査票を配布し、その場で記入してもらい回収する方法をとった。調査票配布130件、回収128件、うち有効回答数122件、有効回答率は95.3%であった。

調査の主な内容は、家族の状況、家庭内における生活行為の実態、家族関係の評価、父親・母親との関係とその評価、理想の父親像・母親像、望ましい家庭生活のイメージ等である。

3. 対象学生を取りまく家庭の現状

3.1 家族構成

回答者は一回生が全体のほぼ9割を占め、平均年齢18.6歳、親の平均年齢は父親が49.9歳、母親が46.6歳であった。家族構成は二世代家族いわゆる核家族が約6割、祖父母と暮らす三世代家族は全体の1/3程度である（図4)。一家族あたりの平均人数は4.5人、家族に単身赴任者または下宿をしているものがいる家庭は1/4にのぼっている。

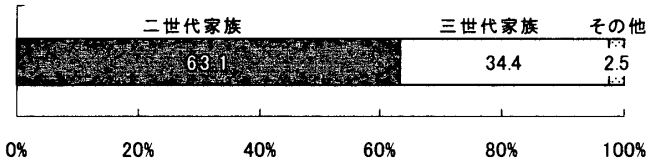

図4　家庭型

3.2 親への経済的依存度

学生が経済的にどの程度親に依存しているかをみる。月々親から小遣いをもらっている学生は43.4%、必要な時に必要なだけもらっているものは38.5%となっている。アルバイトで収入を得ている学生は7割に及び、その平均収入は2.9万円であった。何らかのかたちで親から小遣いを得ている学生は6割であり、さらにアルバイト収入も得ている学生は3割を占めている（図5)。小遣い平均金額は4.6万円であった。

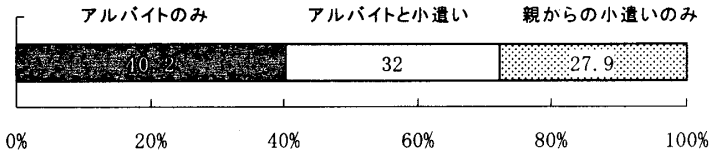

図5　収入

3.3 学生の在宅時間

学生の睡眠時間を除いた平日の在宅時間（一人暮らしの場合は実家に帰った際の在宅時間）は、5時間以上8時間未満が41.8%と最も多い。アルバイトをしている学生の47.1%が5時間未満となっており、アルバイトをしていない学生に比べてかなり在宅時間が短い（図6)。

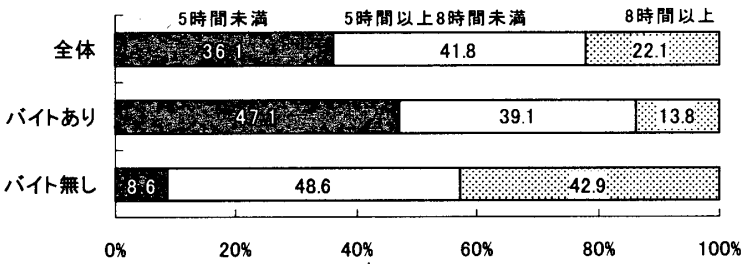

図6　在宅時間平均（平日・睡眠時間除く）

3.4　親の就業形態

親の就業形態をみると共働きが半数を占めている。父親のみ仕事に就いているのは41%であった（図7）。

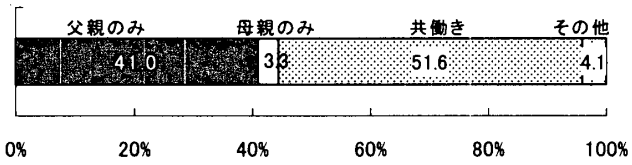

図7　親の就業状態

4. 家族で共にする行為について

家族は日頃どのように交流しているのだろうか。予め家庭における行為をあげ、過去1年間にどの程度の頻度で行い、またそれを誰と行ったかを尋ねた（図8. 9）。なお、一人暮らしの場合には、帰省時の状況について記入を求めた。

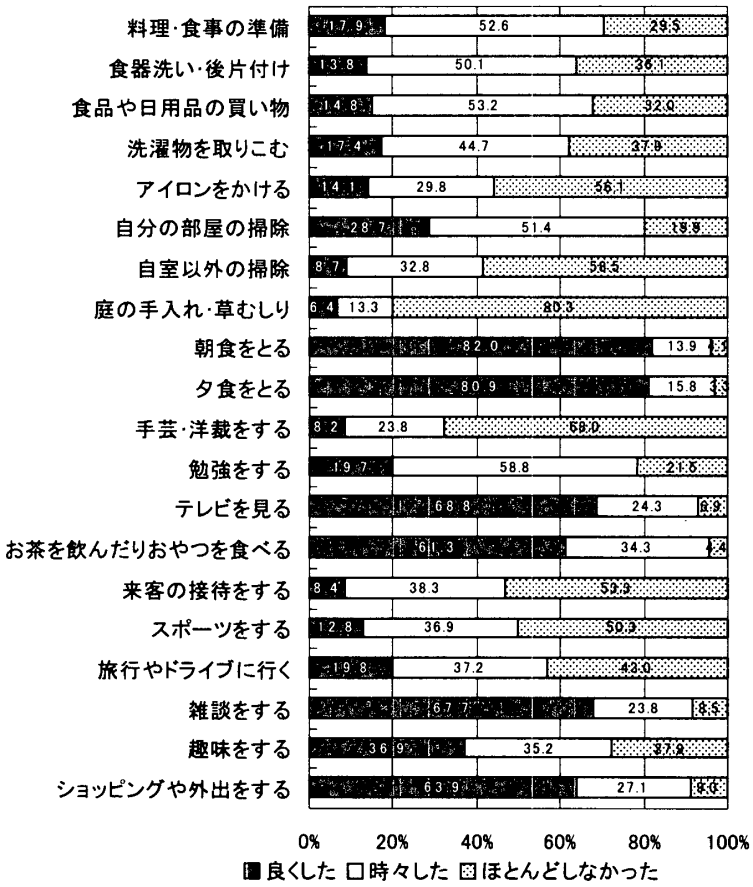

図8　家族で共にする行為の頻度（過去一年間）

4.1　家事について

「食器洗い・後片付け」、「洗濯物の取込み」、「日用品の買い物」など家事的要素については全体の6から7割が「よくした」もしくは「時々した」と回答している。「時々した」の割合が高いことから、たいていの学生が積極的ではないが、家事に関わっているといえる。一方、その行

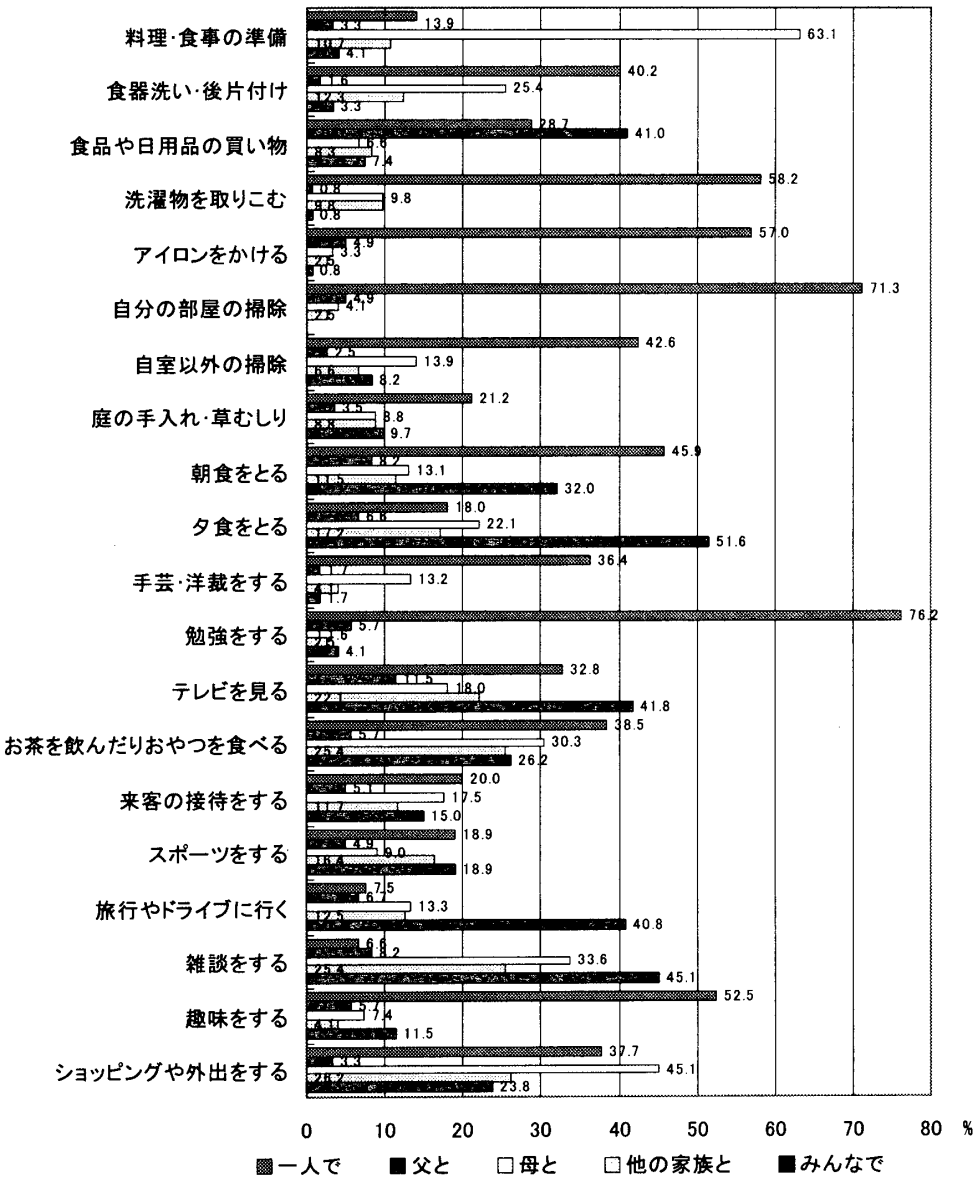

図9　行為を共にした人

為を主に誰としているかの回答をみると、「料理・食事の準備」を母と、「食品や日用品の購入」を父と行っている以外は、ほとんどが「ひとりで」行われている。共働き世帯が多いためか、家事が家族との交流を促進する要素になっていないことがわかる。

4.2　食事について

設問中、家庭で比較的よく行われる行為として朝食、夕食があげられる。どちらも8割以上が「よくする」と回答している。朝食はほぼ半数がひとりで済ませているが、夕食の場合は逆に家族みんなで食卓を囲む家庭が半数あり、家族が集まる数少ない場を提供している。

4.3　家族の団らんについて

家族の団らんの内容について検討した。「テレビを見る」「雑談をする」「お茶を飲んだりおや

つを食べる」行為は6から7割とよく行われ、時々を含めると9割に及んでいる。「テレビ」「雑談」はみんなで行ない、「おやつ」「趣味をする」等は一人で行う割合が高い。博報堂生活総合研究所「日本の家族10年変化」[4]によると、この10年で団らんの過ごし方は大きく変化した。「雑談」が半減し、団らんは雑談からテレビへとシフトしている。個人でもテレビを持つ傾向が強まっているが、テレビは家族の分散化の時代にあって、未だに家族みんなを一つの部屋に集める求心力となっている。

次に、家族の娯楽についてみる。ここで注目する項目は以下の3つである。「時々する」を含めて「スポーツをする」は49.7%、「旅行やドライブに行く」のは57.0%とほぼ半数の学生が「実施した」と回答している。準備や費用がかかるにもかかわらず家族のイベントとして家族みんなで行動している。3つ目の「ショッピングや外出をする」は日常的に行われており、母親とよく出かけているようである。

5. 両親との関わり方について

日常生活において、「家庭の中で最もよく話をするのは誰か」の質問では、母親が68%と最も多く、ついで姉妹23.8%、兄弟6.6%、父親や祖父と回答したのはそれぞれ0.8%と非常に少なかった（図10）。

また、家族がそろってくつろぐ時間は週にどれ程あるか質問したところ、週の半分以上家族がそろう家庭は19.7%、1〜3日はそろう家庭が37.7%、ほとんどない家庭が最も多38.5%あった（図11）。家族そろってのだんらんやくつろぎの少なさがうかがえる。学生の在宅時間は5〜8時間が最も多かったことから学生の方に時間的な余裕がないとは考えにくい。

「友人に家族の話をするか」の質問においては、よくする、どちらかといえば話すと回答した学生は、全体の約7割にのぼり、友人との話題には一役買っている（図12）。

反対に、家庭外における自分のこと、悩み事等を親にどれほどうち明けているのかを父親、母親に分けてたずねた（図13）。

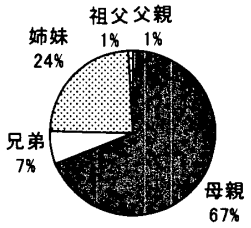

図10　日常の話し相手

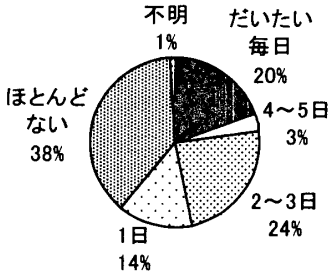

図11　家族団らんの時間

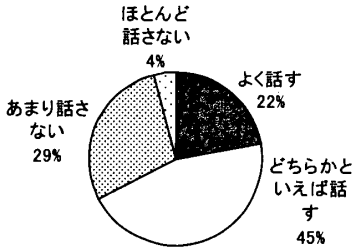

図12　友人に家族の話をする

5.1　母親との関わり

学校での出来事を母親に、よく話す、どちらかといえば話しているのは7割、「悩みごとを打ち明ける」もしくは「相談する内容によってはうち明ける」をあわせれば、全体の8割が母親に自分の内面を見せている。家族の中で最も話をするのも母親であったことからも、母親に対する

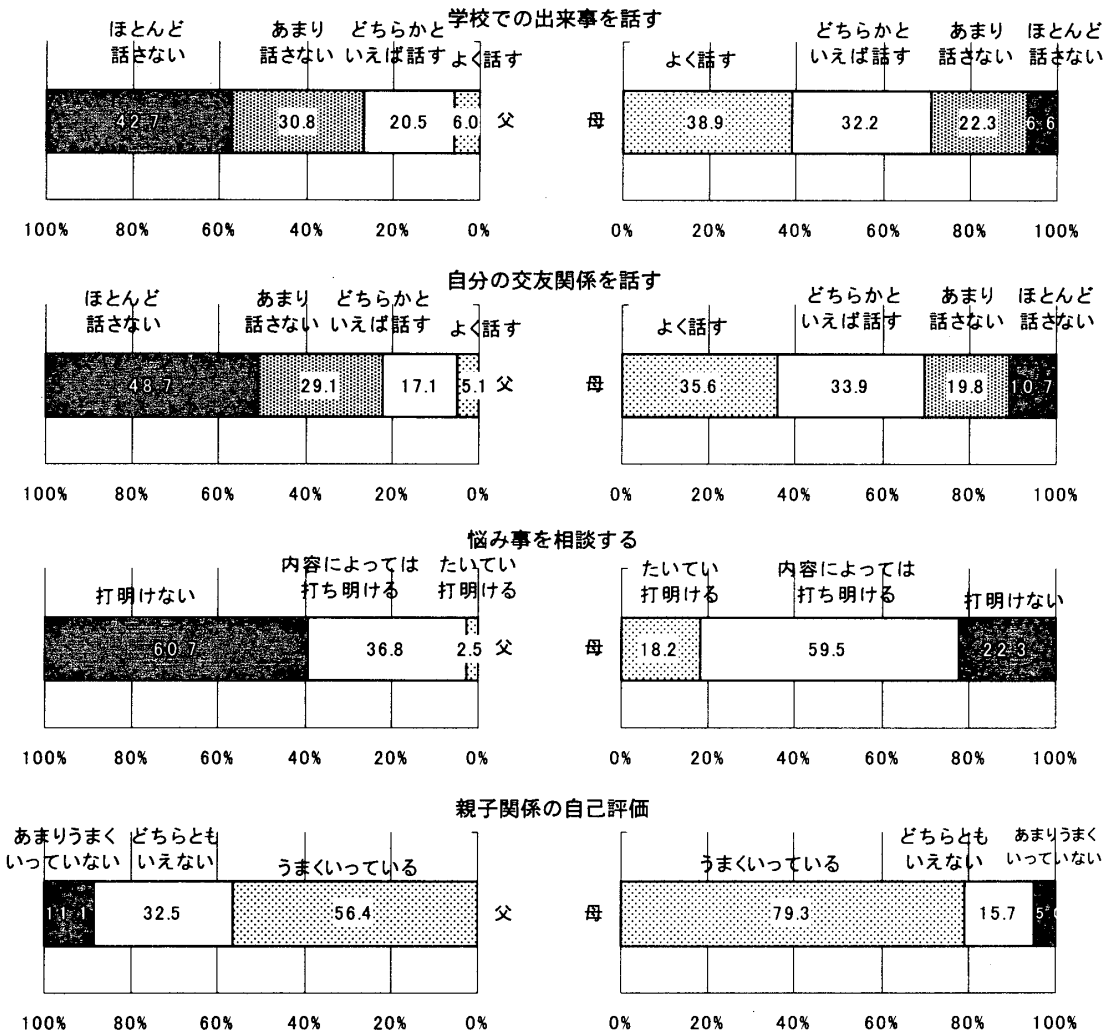

図 13　親との関わり

依存度は大きい。

さらに、母親との関係がうまくいっていると感じている者は 8 割と高い割合を占めている。つまり母親との交流は、日常的に接し、その交流においても満足している状態であるといえる。

5.2　父親との関係

日常父親と最もよく話すと回答したのは、1 割にも満たなかった。また学校での出来事を、話さない、あまり話さないと答えた割合はほぼ 7 割を占めている。悩みごとの相談については、うち明けない者が 6 割を超え、積極的に相談を持ちかけると回答しているのは 2.3%ときわめて少ない。母親との交流が充分に行われている一方、父親とは日常的にほとんど会話をしないものと考えられる。図 7 に示すとおり、大多数の父親は仕事につき家計を支えている。父親は仕事に追われ、子どもの関係は希薄にならざるをえない。

その一方で父親との関係が上手くいっているか尋ねた。上手くいっていると感じている学生は 56.4%におよび、ほとんど交流がないものの父親との関係には満足している。

6. 学生が描く家族像

最後に、「将来自分がなりたい母親像」「夫に望む父親像」「今後の家族生活に望むもの」について自由回答を求めた。

6.1 理想の母親像

最も多かった意見は、「友人のように相談相手になれる」、「信頼でき何でも話せる」母親である。子どもに対しては「よく理解し、意志を尊重し、のびのびと育てる」といった、子どもの自主性に任せた子育てを希望している。母親像として家事をきっちりこなす、仕事と両立させる等、妥協しない厳しい態度が求められている。自分の母親を理想とする意見も少なくはなかった（表1)。

6.2 父親に希望すること

子どもとよく遊ぶ、一緒に家事をする、家庭を大切にするといった子育て、家事分業に積極的に参加してくれる夫を理想としている。また、母親にはひたすら寛大な子育てを希望していたためか、父親には威厳がある、怒るときはきちんと怒るような行き過ぎたときの引き止め役としての役割を期待しているようである。一方で、あまり何ごとにも口を出さずそっと見守る、現在の父親のような役割を希望する学生もわずかながらいる（表2)。

6.3 今後親と一緒にしてみたいこと

今後したいことには、旅行（海外含む）や、スポーツをする等、レジャーを楽しむ意見が多数を占める。次いで話し合い、飲みに行くがあげられている。誕生日を祝う、季節の行事を楽しむ、料理をつくって両親をもてなしたいといった、両親に感謝の気持ちをあらわしているものもみられたが、イベントとしての行為が中心であり、あまり日常的に交流を深める提案はみられない(表3)。

7. まとめ

本学の学生128人を対象に調査を実施し、家庭における行為を通じて家族との交流の実態を把握、そして家族との交流に関する彼等自身の評価、家庭に対するイメージについてまとめた。

① 家族構成は二世代家族が約6割、三世代家族は全体の3割強程度、共働き世帯が半数を占め、片親だけの収入に頼っている世帯は4割であった。アルバイトをしている学生は7割、うち3割はさらに毎月の定期的な小遣いを親から得ている。

② 何らかの家事手伝いを行なっている学生は全体の6〜7割いるが、一人ですることが多く、家事が家族交流を推進するかたちにはなっていない。8割以上が朝食、夕食を家でとるが、朝食は一人ですませることが多い。夕食は半数が家族でとり、「テレビを見る」「雑談をする」などが家族団らんの中心であるといえよう。

③ 家族そろってくつろぐ時間は、ほとんどないが最も多く38.5%、次いで1〜3日はそろう家

表１　あなたが将来家庭をもったときどんな母親になりたいと思いますか

友達のように相談相手になってくれる：２２
子どものことをよく理解している：１１　何でも話せる：１０
優しい：７　子どもから信頼される：７
自分の母親のようになりたい：６　明るい：５
子育てと家事の両立をきっちりする：４　専業主婦：４
子どもをのびのびと育てる：４　家事をきっちりこなす：４
寛容：３　頼りになる：２
子どもの意思を尊重する：２　夫と仲良くする：２
ものうるさくない：２
賢い　偏見のもたない人　子どものことをよく考える
家庭にどっぷりつからず自分の意思をしっかり持った人

表２　あなたが夫に望む父親像はどのようなものですか

子どもとよく遊ぶ：１９　一緒に家事をする：１４
頼りになる：９　家庭を大切にする：９
優しい：８　何でも話せる：６
休日は家にいて家族サービスをする：６　一緒にスポーツをする：６
威厳がある：５　寛大：４　収入：４
子どもの世話をする：４　怒るときはきちんと怒る：３
フレンドリーな人：３　暴力を振るわない：２
アメリカンな人：２　物知り：２　面白い：２
あまり何事にも口を出さずそっと見守る人：２
陽気　強い　尊敬できる　自分をよく理解してくれる人
煙草を吸わない　生命力がある　ギャンブルをしない
お洒落な人　柔軟性のある人　偏見のもたない人

表３　今後親と一緒にやってみたいことがありますか

旅行：４３　海外旅行：７　話し合い：５
ゴルフ：３　呑みに行く：３　温泉旅行：３
料理を伝授して欲しい：３　スポーツをしたい：３
カラオケ：２　外食：２　ゆっくりしたい：２
食べ放題　家の掃除　彼氏と一緒に遊ぶ
買い物　誕生日を祝う　同じ趣味を持ちたい
海外で2、3ヶ月ゆっくりしたい
自然のなかにある茶屋でくつろぐ
季節事の行事を一緒に楽しむ
姉妹で料理を作って両親をおもてなししたい

庭が37.7%であった。

④ 母親には大学での話をし、悩みごとを打ち明けているが、父親にはあまり話をしない。全く違った傾向が出ているにも関わらず、母親との関係だけでなく、父親とも上手くやっていると自己評価している。

⑤ 理想の母親のイメージとして、子どもが小さい頃はしっかり世話や家事をし、成長した後は友だちのように何でも話せる信頼できる母子関係を築くこと、さらに仕事と育児の両立ができ、自分をしっかりもっている母親となることを望んでいる。

⑥ 夫に望む父親像はときには厳しいが、よく話をし、困ったときには相談にのってくれる頼もしい父親である。また伝統的な役割分業にこだわらない、家事育児を分担してくれる夫を期待している。

⑦ 今後親としたいことには、旅行（海外含む）や、スポーツをする等、レジャーを楽しむといったイベント的交流を望む意見が多数を占めている。

8. おわりに

家庭の役割として「心の安らぎ」が求められているが、家庭における行為の実態をみると、一人で行なう行為が多く、家族と共に行なう行為は少ない、希薄な人間関係がすけてみえる。特に、父親とは話をする機会も少なく、母親との交流に比べて大きな隔たりがある。それにも関わらず家族関係に対して「うまくいっている」と評価し、満足度は高い。現在、家族関係はほどほどの距離感を持ったつながり「緩系化」[5] が望まれており、意識して絆を深めるつもりはないようにみえる。しかし、求めている情緒面、生きがいとなるべき人間関係の質的側面の充足は、行為を共にしていくことでお互いの理解が深められていくものではないだろうか。

引用文献

1) 厚生省：厚生白書平成 10 年度版 p 53、ぎょうせい、平成 10 年
2) 厚生省：厚生白書平成 10 年度版 p 53、ぎょうせい、平成 10 年
3) 経済企画庁：国民生活白書平成 4 年版、p 100、大蔵省印刷局、平成 4 年
4) 調査年報 1998　連立家族（日本の家族 10 年変化）、博報堂生活総合研究所、1998
5) 家族の 10 年の変化の傾向を、個人化、緩系化、合理化、平等化、女系化、妻権化と表現している。調査年報 1998　連立家族（日本の家族 10 年変化）、p 22、博報堂生活総合研究所、1998

参考文献

山田昌弘：近代家族のゆくえ　家族と愛情のパラドックス、新曜社、1994

四方寿雄：家族の崩壊、ミネルヴァ書房、1999

松岡明子、丸島令子：家族、同文書院、1994

藤原智美：家族を「する」家、プレジデント社、2000 年